

創価教育の歴史と中国

伊 藤 貴 雄

本日は、このように意義深きシンポジウムで報告する機会を頂き、誠に有難うございます。私からは、創価教育の三代の師弟が提唱し実践してきた、日中友好の軌跡について、お話させて頂きたいと思います（以下、本稿では敬称を略させて頂く）。

創価教育と中国との歴史において、まず思い浮かぶのは、1968年に池田大作（現・創価学会名誉会長）が発表した「日中国交正常化提言」であり、事実、歴史家の多くは同提言がその後の日中外交に与えた影響の大きさに言及します。しかし本日は、時間軸を遡り、同提言が発表されるまでの思想的背景と歴史的経緯に光を当てることにします。それによって、同提言に籠められた日中友好への願いの深さを、一層明瞭に照らし出すことが可能になると思うからです。

実は、創価教育と中国との関係は、20世紀初頭の牧口常三郎の代にまで遡るものであり、この視点に立つならば両者の交流史は100年以上に及びます。牧口の理念と実践は、弟子の戸田城聖によって継承され、さらにその弟子池田によって発展拡大を見ました。まさしく「源遠長流」という格言を想起させます。日中友好は、三代にわたる悲願と言っても過言ではないのです。

1 牧口常三郎と中国

牧口常三郎（1871～1944）は、孫中山（1866～1925）とほぼ同世代に当たります。初期は地理学者・教育者として活躍し、1000頁に及ぶ第一著作『人生地理学』（1903年）は長く版を重ねました。同書は日露戦争勃発の4カ月前の刊行ですが、すでに開戦論が世論の多数を占めるなかで、一貫して世界市民的見地から平和論を主張しています。

同書はまた、世界市民の育成を論じた教育学書でもあります。人間誰しも、自分の身边を観察すれば、国内はもとより、海外からの無量の影響に気づかざるを得ない。たとえば、靴の底革はアメリカから、ランプの油はアラブから、眼鏡のレンズはドイツから輸入した原料で作られているというふうに⁽¹⁾。とりわけ、日本人が中国大陆から受けている恩恵として、牧口は、醤油や味噌の原料である「大豆」、衣類や製油の原料となる「綿」や「麻」を挙げています⁽²⁾。こうして子どもたちに、中国をはじめ海外からの恩恵を正しく認識させ、外国に対する理解と尊敬を育

(1) 『牧口常三郎全集 第1巻』（斎藤正二校訂、第三文明社、1983年）、12頁。

(2) 『牧口常三郎全集 第2巻』（斎藤正二校訂、第三文明社、1996年）、92頁。

Takao Ito（創価大学文学部准教授）

* 本稿は、2010年8月27日に中国・西安市の陝西師範大学で開催された「池田大作・香峯子研究シンポジウム」における基調報告の原稿である。

むことこそ、牧口がねらいとした世界市民教育でした。

同書は最後に、人類の歴史が「軍事的競争時代」から「政治的競争時代」へ、そして「経済的競争時代」へと推移してきたとの総括をおこなったうえで、今後は「人道的競争時代」に向かうべきであると提唱します。人道的競争とは何か。それは、従来の武力や暴力に代わって、言葉や思想という「無形の勢力を以て自然に薫化する」⁽³⁾ことです。最近の研究で、この「薫化」という言葉は、中国明代の古典『菜根譚』の「遇暴戾の人、以和氣薫蒸之」（暴戾的人に遇わば、和氣を以てこれを薫蒸し）⁽⁴⁾という一節に由来することが指摘されました⁽⁵⁾。牧口の人道主義の知的源泉には、中国の非暴力的な思想があったのです。

その後、牧口は1904年2月から数年間、東京の弘文学院で『人生地理学』の講義をおこないます。同学院は、中国人留学生のための学校で、魯迅（1881～1936）が学んだことでも知られています。魯迅は1904年3月の卒業であり、約2カ月ですが、牧口の在籍期間とも重なっています。興味深いのは、魯迅と同じ浙江省出身の留学生によって、『人生地理学』の最初の中国語訳（部分訳）が作られたことです（『浙江潮』第9期〔1903年11月〕、第10期〔同12月〕）。また、1906年には、江蘇省出身の留学生の手で『人生地理学』講義が翻訳され（『江蘇師範講義 地理』）、翌1907年には、青島の世界語言文字研究会によって『人生地理学』全編が翻訳されています（『最新人生地理学』⁽⁶⁾）。

今日、これらの翻訳はいずれも、清末中国で比較的影響があった外国の人文地理学概説書に数えられています⁽⁷⁾。とくに『最新人生地理学』は、中国における「郷土地理教育」の発展と、「自由民権学説」の伝播とに与えた影響が評価されています⁽⁸⁾。ちなみに、牧口は1905年に中国人留学生のために、『教科日誌 日本地理之部』『教科日誌 外国地理之部』という2冊の小冊子も刊行しています⁽⁹⁾。

このように中国と学問的に深い関係のあった牧口にとって、後年の日本の外交政策、とくに1930年代の中国との戦争は、到底容認できるものではありませんでした。いわゆる「十五年戦争」の期間、日本政府は中国との戦争を「東洋平和の為」と位置づけていましたが、この種の聖戦論に牧口は最後まで反対しつづけました⁽¹⁰⁾。『人生地理学』以来の世界市民的教育理念を実践するべ

⁽³⁾ 同上、398－399頁。

⁽⁴⁾ 今井宇三郎訳『菜根譚』（岩波書店、1975年）189頁によれば、「力自慢の乱暴者に会ったならば、温和な心をもって感化するようにし」という意味である。

⁽⁵⁾ 山室信一「日本の非暴力思想の水脈とその展開」『東洋学術研究』第49巻第1号（東洋哲学研究所、2010年）、234頁、および250頁。

⁽⁶⁾ 高橋強『『人生地理学』と中国』『大白蓮華』2003年6月号（聖教新聞社）、44－47頁。なお、人道的競争を論じるくだりに登場する「薫化」という言葉は、『最新人生地理学』では「薫蒸」と訳されている（同書第3編、164頁）。上記の山室氏の説を裏づけるものと言えよう。

⁽⁷⁾ 鍾振環『晚清西方地理学在中国』（上海古籍、2000年）、210頁。

⁽⁸⁾ 郭双林『西潮激荡下的晚清地理学』（北京大学出版社、2000年）、181－184頁、および218頁。

⁽⁹⁾ 塩原将行「知られざる牧口先生の事跡」『大白蓮華』2003年6月号（聖教新聞社）、57－60頁。

⁽¹⁰⁾ 伊藤貴雄「牧口常三郎は国家政策の何に抵抗したか」『創価教育研究』第3号（創価大学創価教育研究所、2004年）、115－136頁。

く、1930年に『創価教育学体系』（～1934年、全4巻）を発表し⁽¹¹⁾、創価教育学会を設立。1937年からは全国的に民衆教育運動・生活改革運動を展開しました。そして、1943年に軍部政府の弾圧を受けて投獄され、翌1944年に獄死しました。

2 戸田城聖と中国

戸田城聖（1900～58）は、周恩来（1898～1976）の2歳年下に当たります。1920年、20歳のときに牧口の弟子となり、以後20年以上にわたり師の執筆活動・教育運動を支えました。1943年、師と共に投獄され、終戦の年に出獄。創価学会の再建に奔走し、1951年に第二代会長に就任しました。

戦時中、戸田が日本の中国侵略を批判していたことが、元関東軍の参謀・近藤大尉の証言によって知られています。1941～42年頃、近藤が中国との戦いを「聖戦」と呼んだとき、戸田はこう反論したそうです——「それは中国にとってもいえることじゃないのですか？ 日本の対支政策のみが聖戦で、中国の対日作戦がそうではないとする論理は成り立たない。そうでしょう？ あそこには四億の民がくらしているんですよ。その人たちの生活を破壊する聖戦などというものがあり得るでしょうか。聖戦は、四海絶対平等と平和、生命の尊厳を犯すものに対して敢然と立ち上がる場合にだけ使われることばです」⁽¹²⁾。近藤はこの言葉に「ほおを殴られたような強烈なおどろき」を覚え、「戸田先生、これが私だったからいいようなものの、他の将校だったら多分先生は憲兵隊行きでしょう」と答えたそうです⁽¹³⁾。

戦後、戸田は折に触れて中国の思想や文化の紹介に努めました。1947年、自身の経営する出版社から『民主主義大講座』全5巻を発刊しますが、第3巻には、孫中山と親交のあったジャーナリストの太田宇之助が「中国の三民主義」について寄稿しています⁽¹⁴⁾。また1950年からは毎週日曜に、若き日の池田に個人教授をおこない（これは「戸田大学」と呼ばれます）、そこでは『十八史略』等の中国古典を教材に含めています⁽¹⁵⁾。さらに1952年以降、青年育成のために月2回勉強会を設け、『水滸伝』にちなんでこれを「水滸会」と名づけます。教材は『水滸伝』（1952～54年にかけて読了⁽¹⁶⁾）や『三国志』（1955年春～秋にかけて読了⁽¹⁷⁾）等でした。この講義について池田は、「中国思想についての恩師の説き方は、いわば独自の発想に由来するものだ。従来の

(11) 斎藤正二『牧口常三郎の思想』（第三文明社、2010年）は、『人生地理学』から『創価教育学体系』まで、牧口が一貫して平和主義を唱えた軌跡を詳細に跡づけている。

(12) 島村喬『日蓮とその弟子たち』（波書房、1970年）、234～236頁。著者の島村が近藤から直接聞いた話として記している。

(13) 同上、235頁。

(14) 太田宇之助「中国の三民主義」『民主主義大講座—実践及形態（上）』室伏高信・今中次磨・加田哲二・堀真琴編（日本正学館、1947年）、第三論文。

(15) 池田大作『若き日の日記〔1〕』（聖教新聞社、2005年）、265頁（1953年1月28日の記述）。

(16) 同上、1952年12月16日の記述。および、池田大作『若き日の日記〔2〕』（聖教新聞社、2005年）、13頁（1954年2月9日の記述）。

(17) 池田大作『若き日の日記〔2〕』、174頁（1955年3月6日の記述）。および、同書、216頁（同年9月27日の記述）。

日本人が『中国』に対して抱くイメージを、まったく転換してしまうような創見に溢れていた」と回想しています⁽¹⁸⁾。

こうした青年育成の場で、戸田は1952年、自身の思想はつまるところ「東洋民族、結局は地球民族主義であります」との表明をおこないます⁽¹⁹⁾。またこの発言に続けて、「日本の現状を、朝鮮、中国を救うのは、学会以外にありません」と述べています⁽²⁰⁾。アジアの平和実現を願う師の言葉を、若き日の池田は胸に刻みました。このとき戸田が提唱した「地球民族主義」という理念が、のちに「日中国交正常化提言」の基盤になったことについては後述します。

逝去年前の1957年にも、戸田は機関誌の巻頭言でこう綴っています。「日本の民衆も幸福にならねばならぬ。また、同じ東洋民族たる韓国の民衆も、中国の民衆も、皆われらと共に手をつないで、幸福にならねばならぬ」⁽²¹⁾。これは単なるスローガンではありませんでした。同年、戸田は弟子の一人を大阪の参議院補欠選挙候補に立てますが、その際戸田が提案した3つの選挙公約のうち第一は「中国貿易の促進」でした⁽²²⁾。こうした戸田の思想が弟子たちに影響を与えたことは確かです。「中国には、なにかしら親近感を覚えるのだ。それは、私の恩師が、生前、中国がこれからの世界史に重要な役割を果たすことを、つねづね私たちに語っていたことが脳裏に刻まれているからであろう」⁽²³⁾。これは池田が1974年6月、初訪中の際に記した言葉です。

3 池田大作と中国

池田大作もまた、若き日から中国と深い縁を結びつつ精神を形成しました。敦煌研究院名誉院長の常書鴻（1904～94）との対談集『敦煌の光彩』（1990年）のなかで、池田は自身の少年時代を回想しています。小学校5年生のとき、教室に張ってある大地図で中国奥地付近を見ていたところ、担任の教師が「池田君、そこは敦煌といって、素晴らしい宝物が一杯あるところだぞ」と教えてくれ、以来敦煌と中国に強い憧れを抱きはじめた、と⁽²⁴⁾。

他方、日中戦争の惨禍についても、中国の戦地から帰国した長兄を通して聞き知ります。香港中文大学終身主任教授の饒宗頤（1917～）との対談集『文化と芸術の旅路』（2009年）で、池田は、1940年に長兄が語った「日本は本当にひどいよ。あれでは中国の人が、あまりにもかわいそうだ」という言葉を紹介しています⁽²⁵⁾。また同対談では、「私はこれまでに、こうした真実の歴史を青年たちに繰り返し語ってきました。それは、未来の責任をもつ青年たちが中国侵略の悲惨な歴史を決して忘れることなく、偏狭な国家主義への反省と怒りを継承してほしいという願いからにほ

⁽¹⁸⁾ 池田大作『若き日の読書』（第三文明社、1978年）、166頁（「織りなす人物の長編詩—『三国志』から」）。

⁽¹⁹⁾ 『戸田城聖全集 第3巻』（聖教新聞社、1983年）、460頁。

⁽²⁰⁾ 同上、461頁。

⁽²¹⁾ 『戸田城聖全集 第1巻』（聖教新聞社、1981年）、256頁。

⁽²²⁾ 「池田大作の軌跡」編集委員会『池田大作の軌跡』（潮出版社、2006年）、196—197頁。

⁽²³⁾ 池田大作「精神の扉を開く」『日中文化交流』1974年6月10日号（池田大作『中国の人間革命』毎日新聞社、1974年、13—14頁に再録）。

⁽²⁴⁾ 常書鴻・池田大作『敦煌の光彩—美と人生を語る』（徳間書店、1990年）、18—19頁。

⁽²⁵⁾ 饒宗頤・池田大作『文化と芸術の旅路』（潮出版社、2009年）、47頁。

かなりません」とも述べています⁽²⁶⁾。

終戦直後の1946年、18歳の池田は、故郷の青年読書サークルに入り、古今の多くの名著に親しみます。そのころ綴った読書ノートには、杜甫の詩「春望」が筆記してあります⁽²⁷⁾。「国破山河在 城春草木深」（国破れて山河在り、城春にして草木深し）の一節は、「敗戦の焦土に生きる十代の青年にとって実感であった」と、のちに池田は述べています⁽²⁸⁾。焦土を見つめながら、池田は「正しい人生とは」、「本当の愛国者とは」、「天皇をどう考えるか」といった問いで呻吟しました。そうしたなかで1947年に戸田と出会います。「二年間の獄中生活に耐え、軍国主義思想と戦った人物には、信念に生きる人間の崇高さと輝きがある。極論すれば、当時の私にとっては『戦争に反対して獄に入ったか否か』ということが、その人間を信用するかしらないかを判断する大きな尺度となっていたといっても過言ではない」⁽²⁹⁾。以後、戸田の弟子として、創価学会の運動に参加します。

戸田による個人教授や水滸会を通して『水滸伝』や『三国志』を学ぶ傍ら、池田は自ら求めて、司馬遷『史記』などの中国古典を研鑽しています⁽³⁰⁾。この研鑽は恩師の没後も続けられ、第三代会長就任直前の1960年2月の日記には魯迅の言葉を引用しています。「路とは何か。それは、路のなかったところに踏み作られたものだ。荊棘ばかりのところに開拓してできたものだ。むかしから、路はあった。将来も、永久にあるだろう」⁽³¹⁾。のちに、このときの心境を池田は次のように綴っています。「当時の私の胸中を支配していたのは、恩師が、文字どおり『荊棘』ばかりの、荒野に切りひらいた道を、万年に崩れぬ『永遠の大道』にすることのみであった。…魯迅の言葉は、そんな若き心の琴線に鋭く響いたのであった」⁽³²⁾。

このころから、日中友好という課題が池田のなかで大きな位置を占めはじめます。1960年頃、日中関係は完全に冷え込んでいました。1957年に首相に就任した岸信介が反中国的な発言を繰り返し、1958年には中国国旗毀損事件（長崎事件）が起きたこともあり、日中間の貿易は久しく断絶していました。こうした状況を打開するべく、元厚相・文相・農相の松村謙三（1883～1971）や元通産相で財界人の高崎達之助（1885～1964）は、1959年から1962年にかけて中国を訪問し、両国関係改善に尽力します。訪中時に彼らは周総理に創価学会と池田の存在を伝えたとはいいます⁽³³⁾。1963年9月、高崎は池田を訪問し、日中国交回復のための助力を依頼しました⁽³⁴⁾。1964

⁽²⁶⁾ 同上、47～48頁。

⁽²⁷⁾ 池田大作「読書ノート（六）―入信前後（昭和二十一年～二十二年頃）の雑記帳から」『第三文明』1964年8月号所収。

⁽²⁸⁾ 池田大作『私の履歴書』（日本経済新聞社、1975年）、72頁。

⁽²⁹⁾ 同上、79頁。

⁽³⁰⁾ 池田大作『若き日の日記〔2〕』148頁（1955年2月2日の記述）。

⁽³¹⁾ 池田大作『若き日の日記〔4〕』（聖教新聞社、2006年）、175頁（1960年2月4日の記述）。引用文は『魯迅評論集』竹内好訳（岩波書店、1953年）による。

⁽³²⁾ 池田大作『続・若き日の読書』（第三文明社、レグルス文庫版、2001年）、140頁（『民衆の時代』への曙光―魯迅『阿Q正伝』から）。

⁽³³⁾ 王永祥編・南開大学周恩来研究センター『周恩来と池田大作』周恩来・鄧穎超研究会訳、西園寺一晃監修（朝日ソノラマ、2002年）、45～50頁。

年11月、池田は公明党の結党に際し、「中華人民共和国の正式承認」と「中国との国交回復」を外交理念として提案します⁽³⁵⁾。

しかし、1965年以降、日中関係に再び亀裂が走ります。首相の佐藤栄作は、アメリカの反共包囲網に同調して台湾重視の政策をとり、輸出入銀行の資金を日中貿易には使わせないとする「吉田書簡」を政府の方針として正式に採用しました。中国との大型取引はすべて無効となり、日中貿易は暗礁に乗り上げます。佐藤首相はその後中国を敵視する政策をとり、1967年にはジョンソン米大統領との共同声明で、中国の孤立化を図る方針を発表します。中国政府はこれを厳しく批判しました。しかし日本のマスコミの多くは、文化大革命について批判的な報道をおこなうばかりで、中国に共感的な姿勢はとりませんでした。

このようななか、1968年9月、池田は「日中国交正常化提言」を発表します。提言の要点は、「中国政府の存在を正式に認めること」、「国連における正当な席を用意し、国際的な討議の場に登場してもらうこと」、そして「広く経済的、文化的な交流を推進すること（すなわち吉田書簡の廃棄）」の3つです⁽³⁶⁾。本日はその詳細には立ち入りませんが、注目したいのは、提言の冒頭で、中国問題を「我々の世界民族主義の理念のうえからも、どうしても触れなければならない第一の根本問題」と述べていることです⁽³⁷⁾。また結びにも、「我々が仏法者という立場にあって、人間性を根幹に、世界民族主義の次元に立って、世界平和と日本の安泰を願っていくことは当然であります」とあります⁽³⁸⁾。牧口の《世界市民主義》および戸田の《地球民族主義》という理念を、1960年代の世界情勢・アジア情勢を見据えて現実に展開したものが、日中国交正常化提言であったと言えるでしょう。

この提言から、今年42星霜——。この間池田は、日中友好のためにたゆまず尽力しつづけました。その行動の軌跡を辿ると、4つの特徴が浮かび上がってきます。

1つ目に、一貫した信義。中日関係がどれほど冷え込んだ時にも、中国の指導者・民衆との対話を持続しました。“信義なくして友好なし”、これが池田の人間主義哲学です。

2つ目に、精確な歴史認識。中国は日本にとって文化の大恩の国であること、またその日本が戦争中にどれほど中国に非道を働いたかということを、あらゆる機会に訴えつづけました。“歴史なくして未来なし”、これが池田の平和哲学です。

3つ目に、文化・芸術への尊敬。中国の音楽や演劇を民衆音楽協会で招待し、絵画展を東京富士美術館で開催し、学者・思想家との対談集を出版するなど、中国の文化・思想の紹介に努めてきました。“尊敬なくして理解なし”、これが池田の文化哲学です。

4つ目に、青年の交流の重視。日中国交回復後初めての中国からの留学生を創価大学で受け入れ、また中華全国青年連合会と日本の青年との交流団を25年にわたり積み重ねてきました。“青年

(34) 同上、49頁。

(35) 池田大作『新・人間革命 第13巻』（聖教新聞社、聖教ワイド文庫版、2006年）、28頁。

(36) 池田大作『世界平和実現の鍵』『中国の人間革命』（毎日新聞社、1974年）、213頁。

(37) 同上、211-212頁。

(38) 同上、231-232頁。

なくして発展なし”、これが池田の教育哲学です。

おわりに

以上、簡単ではありましたが、創価教育の歴史と中国との関係を辿ってみました。牧口も、戸田も、池田も、若き日から中国の思想文化に親しみと尊敬を抱き、日本の軍国主義・国家主義的傾向と妥協なく対決し、日中友好こそ世界平和の礎であると考えて、生涯をかけてその実現に尽力しました。「日中友好の金の橋」は、100年におよぶ三代の師弟の悲願であり、私たちは未来にもその精神を継承し、この金の橋を一層堅固で盤石なものたらしめるべく、努力を惜しまぬ決意であります。御清聴有難うございました。

<追記>

本稿の主題に関係して、高崎隆治氏より書簡にて御教示を頂いたことがある。日中国交正常化提言の時代背景に関する証言であるため、その一部を紹介させて頂き、感謝にかえたい。

「〔提言が発表された1968年当時〕日本の教育環境の中では、高校で中国の唐代の詩人を賞揚することすらタブーであったし、ましてや戦後の中国の状況について話すこともできない状態でした。戦争が終った時に中国の指導者が「暴に暴をもって報いるなかれ」と訓令したことで、どれほどの日本人が無事に中国から帰国できたかと生徒に語ったことで、私は危うく職を追われそうになったくらいでした。この時、私の言葉が不問にされたのは、その言葉は蒋介石のもので、蒋介石をほめてどこが悪いかと開き直ったためでした。しかし、蒋介石の言葉かどうかは、私自身も又聞きなのでよく知らなかったのですが、白楽天をほめていけないのなら、貴方が私の代りに講義をしてくれと校長を逆襲したり、「苛政は虎よりも猛なり」という「捕蛇者の説」を予定（授業計画）の三倍もの時間をかけて説明したり、〔…〕当時は、日中友好が禁句であったことを、おそらく〔今日の若い世代は〕知らないであろうと思っています。しかし学生諸君がそういう時代であったことを知らないのでは困ると思います。もし機会がありましたら講義のどこかで余談のようにそんな話をしていただけたらと思っています。」（2007年5月の書簡から）